

2021 年度 入学試験問題

国 語

(第 2 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章 A・B を読んで、後の問いに答えなさい。

A

われわれにとって「買う」ことと「売る」ことはまさに正反対の概念である。一方はお金を支払ってモノを手に入れる行為をあらわし、他方はお金を手に入れるためにモノを他の人に渡す行為をあらわしている。この①正反対の意味であるはずの二つの言葉が、ともに同じ「バイ」という音をもっていることの背後にはきつとなにか歴史的な理由があるにちがいない。そう考えながら、[※]答案用紙の山を横におしわけ、手もとにあつた角川の『漢和辞典』を開いてみると、つぎのような説明がわたしの目のなかに飛び込んできた。

「買」という言葉は、あるものと別のものを取り替える意味である。「X」という言葉を語源としており、はじめボウと発音されていたが後になってバイと発音されるようになったというのである。そして、もともとは売り買い両方の意味に用いられていたこの言葉は、後になって一方の買うの意味にのみ用いられるようになり、他方の売るという意味には「買」という字にモノを差し出すという意味の「出」という文字を組み合わせてつくられた「賣」という文字が使われるようになったという。もちろん、現在の「売」という字はこの賣という字の略字体である。

(中略。筆者は中国語・日本語で「買」に売り買い両方の意味があつたことを確認する。)

中国語の「買」という言葉、日本語の「買ひ」という言葉が、歴史の遠い昔においては、ともに売り買いの区別なく、たんにあるものを他のものと交換するという意味しかもたなかったというこの事実——じつは、それは、なにも中国語や日本語に固有の事実ではない。実際、二十世紀最大の言語学者のひとりに数えられているエミール・バンヴェニストがその晩年に出版した『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集』(一九六九年)という大部の本のなかに収められている経済語彙についてのエッセイの多くは、まさにこの事実の解明にあてられているといっても過言ではない。

A、ドイツ語においても「売る」を意味する verkaufen は「買う」を意味する kaufen から派生した言葉であり、ギリシャ語の「借りる」を意味する daneizomai は「貸す」を意味する daneizo という言葉から派生したことをバンヴェニストは書いている。いや、かれの考察の出発点は、大多数のインド・ヨーロッパ語において「与える」あるいは「贈与する」という意味の動詞の最小単位(語根)をなしている *pey* という言葉が、遠い歴史以前の時代においては「与える」という意味だけではなく、それと正反対の「受け取る」という意味をも担っていたという事実の

発見にあったのである。バンヴェニストはまさにこの言語的事実のなかに、あの有名な『贈与論』(一九三三—三四年、邦訳『社会学と人類学Ⅰ』弘文堂、所収)のなかでマルセル・モースが描き出そうと試みた「古代的な交換形態」というもののひとつの強力な証拠を見いだすことになったのである。

マルセル・モースが、古代的な社会関係を贈与とその返礼によって構成される「互酬的な交換の体系と見なしたことはよく知られている。ひとにモノを贈与することは、理論的には自由であっても実際的にはかならず相手側に返礼の義務を負わせることになり、一方からの贈与と他方からの返礼としての贈与とのそれこそ果てしない繰り返しによって、共同体の内部における財貨の交換が可能になるというのである。この全体的な交換関係のなかでは、与えることは同時に受け取ることであり、受け取ることは同時に与えることである。忘れられてしまった遠い過去において、インド・ヨーロッパ語の *do* という言葉が与えることと受け取ることを同時に意味していたのは、まさにこの「古代的な交換形態」の言語的な反映であつたというわけである。

歴史がくだつて、共同体の内部に貨幣という外部的な存在が進入し、貨幣を手に入れるために相手にモノを与えることと、モノを手に入れるために相手に貨幣を与えることが時間的にも空間的にも切り放されてしまうようになって、本来モノを与えることとモノを受け取ることを同時に意味していた *do* という言葉が、大多数のインド・ヨーロッパ語において与えるという一方の意味に特化したのである。そして、おそらく、かつてはたんにモノとモノとを交換する意味しかもたなかった中国語の「買」という言葉や日本語の「かふ」という言葉が今日の買や買うという意味にのみ用いられるようになったのも、同じ「歴史的な経緯によるのだろう」。

B

「売る」ことと「買う」こと。一方はひとにモノを「与える」ことであり、他方はひとからモノを「受けとる」ことである。われわれにとつて、これほどはつきり対立した意味をもつ事柄はない。もしこの二つを混同してしまうと、泥棒が詐欺師として手に縄がかかってしまうはずである。

B、※めいたんてい名探偵バンヴェニストの最初の仕事は、この「与える」と「受けとる」という正反對の行為を表現するインド・ヨーロッパ語族内の言葉にかんして、ひとつの奇妙な事実が存在していることにわれわれの注意をうながすことから始まるのである。一般にインド・ヨーロッパ語においては、一方の「与える」という行為は *do* という語根をもつ言葉によって表現されている。たとえば英語の *donation*、フランス語の *don*、ラテン語の *donum* あるいはサンスクリット語の *danam* といった言葉はすべて「贈与」という意味をもっている。だが不幸にして、この一般的と思われてきた規則にはひとつの例外が存在しているのである。それは、同じインド・ヨーロッパ語族に属するヒッタイト語において *du* という基本的には同一の語根がもう一方の「受けとる」という行為を意味しているということである。

同じ起源をもつ言葉が二つのまったく正反対の意味をもっているというこの矛盾。だが、われ

らがバンヴェニストは、ながらく言語学者を悩ませてきたこの矛盾にたちまちつぎのように鮮やかな解決を与えてくれるのである。すなわち、この一見した矛盾こそひとつの歴史的な事実にはかならない、とかれは推理する。遠い記憶のあなたの古代の共同体において、「与える」ことは同時に「受けとる」ことをも意味していたのだ、というのである。

バンヴェニストがあたえてくれたこの解決は、じつはマルセル・モースが『贈与論』のなかで発見した「古代的な交換形態」というものの言語学の立場からの再発見にほかならない。よく知られているように、モースは、たとえばマオリ族において、贈られたモノのなかには返礼を怠る受けとり手を殺してしまう魔術的な力が吹き込まれていると信じられていることを指摘する。ひとにモノを贈ることは、それゆえ、受けとる側にならず返礼の義務を負わせることになり、一方からの贈与と他方からの返礼とのあいだのはてしない繰り返しがひきおこされることになるのである。モースは、古代的な共同体とは、このような互酬的交換によってかたちづくられる社会関係の総体として理解しようと主張したのである。与えることが受けとることでもあり、受けとることが与えることでもあったこの ④ 古代的な交換形態の痕跡を、バンヴェニストはインドヨーロッパ語の *por* という語根をもつ言葉の両義性のなかに見いだしたというわけである。

C、モースの『贈与論』を読んでさえいけば、ワトソン博士ですらこの程度の推理は可能であったかもしれない。だがこれで Y というわけにはいかない。いや、バンヴェニストによる本格的な推理はまさにここから始まるのである。なぜならば、古代的な交換形態において与えることと受けとることが同義であったならば、いったいどこから「与える」ことと「受けとる」ことが正反対の意味をもつような経済行為が生まれてくるのだろうか？ 贈与と返礼のあいだの閉じられた円環のなかから、いったいどのようにして「売り」と「買い」とを区別する「商業」なるものが生まれてくるのだろうか？

じつさい、バンヴェニストは、いくらしらみ潰しにインドヨーロッパ語族に属する言語を調べてみても、⑤ 「商業」にあたる経済行為を示す共通の語根を見つけ出すことができないという。もちろん、これは古代において商業が存在しなかったということの意味するのではない。商業とは人類の歴史とともに古く、個々の民族はそれぞれ商業を意味する個別の言葉をもっている。だが、それにもかかわらず、これらの言葉からならんら共通する語根を見いだすことができないのである。

いや、それだけではない。たとえばラテン語において商業を意味する *negotium* という言葉を見てみよう。それはたんに暇 (*otium*) のない (*neg-*) ことを意味しているにすぎないことがわかるだろう。また、英語における *business*、フランス語における *affaire* という言葉を思い出してみよう。それらも本来はたんに忙しい (*busy*) こと、あるいはやるべき (*a faire*) ことという意味であったにすぎない。商業を指し示すこれらの言葉がそれ自身にも明確な意味をもっていないということは、商業というものが共同体のなかにおいて本来じぶん自身を指し示す固有の名前をもっていないかったということをも物語る。

事実として存在した商業が名前として存在しないというこの矛盾。しかしながら、名探偵バンヴェニストは、まさにこの第二の矛盾のなかに「商業」にかんする真実を見いだすことになるのである。

D、「それは、「商業」とは古代的な共同体におけるあの互酬的な交換とはまったく別の出自をもっているという事実である。いくら共同体の内部の歴史を遡さかのぼってみても、商業なるもの起源を見いだすことはできない。商業とは、外国人や自由民といった共同体の外部の人間によって専門的に従事され、共同体と共同体のあいだを仲介ちゆうかいすることによって成立した活動なのだということである。だからこそ、それは共同体の内部の人間にとって「暇ではないこと」、「忙しいこと」とあるいは「やるべきこと」という消極的な言葉でしか指し示しえない事柄であったのである。

※マルクスの言うように、「商品交換とは、共同体の果てるところで、共同体がほかの共同体またはその成員と接触せつしょくする点ではじまった」のである。そして、このようにして成立した商業というものが共同体の外部から内部に侵入しんぱんしてあの「古代的な交換形態」を解体しはじめたとき、はじめて贈与と返礼とのあいだの閉じた円環が「売り」と「買い」という二つの正反対の行為おんに分離りされることになったというわけである。

(岩井克人『二十一世紀の資本主義論』より)

※答案用紙の山……筆者は大学教員として採点していた学生の答案からこの文章の着想を得ている。

※互酬……義務として物を送り合ったり、お互いに助け合ったりする関係のこと。

※名探偵……筆者はこの文章の前の部分で、筆者の提起する問題を解決する役目として、言語学者であるエミール・バンヴェニストの名を挙げている。

※ワトソン博士……架空の名探偵として有名なシャーロック・ホームズの助手。

※マルクス……著名な思想家、経済学者。

問1 空らん A D にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|------|---|------|
| 1 | A | たとえば | B | さらに | C | また | D | しかし |
| 2 | A | たとえば | B | だが | C | もつとも | D | すなわち |
| 3 | A | そして | B | さらに | C | もつとも | D | しかし |
| 4 | A | そして | B | だが | C | また | D | すなわち |

問2 ——線①「正反対の意味であるはずの二つの言葉」とありますが、「売買」と熟語の構成が同じものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 否決 | 2 | 背景 | 3 | 呼吸 | 4 | 貴重 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問3 空らん X にあてはまるものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 質 2 望 3 替 4 財

問4 ——線②「この言語的事実く見いだすことになった」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ドイツ語で「買う」を意味する言葉が「売る」を意味する言葉から派生してきたということが、古代の社会では互いに贈り物をし合うという行為が行われていたのを証明する根拠きよになるということ。

2 大昔の共同体では贈与と返礼が繰り返されていたということが、「与える」と「受け取る」という正反対の意味をはらむ言葉が存在したという事実を確かなものにしていているということ。

3 「与える」と「受け取る」という真逆の意味をその中に含ふくむ言葉があったという事実が、古代的な社会関係は人から物をもらい受けたら他の者に物を与えるという暗黙あんもくの了解りようかいで結びついていたということを示しているということ。

4 *op-op* という語根は、「与える」と「受け取る」という相反する意味を同時に持っていたということが、古代の社会においては贈与とそれに対する返礼が不可分であることを裏付けているということ。

問5 ——線③「歴史的な経緯」の内容を六十字以内で説明しなさい。

(下書きらん)

50	30	10
60	40	20

問6 ——線④「古代的な交換形態の痕跡」とほぼ同じ内容を示す部分をAの文章から二十字以内でぬき出しなさい。

問7 空らん Y にあてはまる四字熟語を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一発逆転 2 一件落着 3 一進一退 4 一喜一憂いきいちう

問8 ——線⑤「『商業』にあたる経済行為を示す共通の語根を見つけ出すことができない」とありますが、どうしてだと考えられますか。次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 商業とは、古くから存在する行為であり、既^{すで}にあるそれぞれの民族固有の名前の他には必要とされていなかったから。

2 商業とは、あくまでお金とモノの交換であり、「贈る」「受け取る」という言葉で示すことのできる行為だったから。

3 商業とは、人類の歴史の中でもごく最近になって生まれた行為であり、言語の分化以前には存在しなかったから。

4 商業とは、共同体外部の人間が仲介するものであり、共同体内部の人間には実態が見えないことだったから。

問9 A・Bの文章に関する説明としてふさわしくないものを次から二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1 Aの文章ではバンヴェニストやモースの意見と筆者の考察を対比させつつ論を進めることで、筆者の意見を明確にしようとしている。

2 Aの文章では複数の言語の起源をたどることによって、昔の人々がどのような形で交換を行っていたのかを明らかにしている。

3 Bの文章では筆者が抱^{いだ}いている疑問の解決を名探偵によって事件が解決されることになぞらえながら論を進めている。

4 Bの文章ではバンヴェニストが行った語根^{ぶんげん}の分析に加え、筆者自身も補足の例を挙げること、より主張をわかりやすくしている。

5 A・Bの文章ともに、「与える」ことと「受けとる」ことが元々は一つの行為であるという事実から商業という経済行為が生まれたと結論付けている。

6 A・Bの文章ともに、経済とはかかわりがないような言語学の視点も使いながら経済行為について論じている。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつてピアノの天才少女と呼ばれた栄伝亜夜はあることをきっかけにピアノから離れてしまいが、周囲の勧めもあり、ピアノコンクールに出場する。そこでかつて同じピアノ教室に通っていたマサルと再会する。コンクール二次予選の課題曲である「春と修羅」にはカデンツァと呼ばれる、即興的な演奏をする箇所がある。予選二日目のマサルの演奏を聴いた後、亜夜は、会場の近くの練習場に向かった。

よし。

椅子を調節し、蓋を開けてすぐにウォーミングアップのスケールを弾き始める。もう長年の手癖のようなもので、半音ずつ調を上げてゆく。

しかし、頭の中ではマサルのカデンツァが鳴り響いていた。

いつしか、マサルのカデンツァを指が再現し始めている。

うひゃー、これは難しい。全部の音を鳴らすのは練習しないと無理だわ。

亜夜は舌を巻いた。

舞台の上のマサルの姿が目の前に浮かんできた。

あの静寂。暗がり。そこに射し込んでくる星ぼしの光――

① マサルのカデンツァを再現していたのが、徐々にアレンジを加え、異なる方向に展開していく。あたしのカデンツァは――あたしの春と修羅は？

その時、耳が異音を拾っていることに気付いた。

なんだろう、この音。

振動。何かを叩いているような――

亜夜はピアノを弾くのをやめて、音の出所を探した。

どんだんどん。どんだんどん。

I やはり、何かを叩いている。どこで？

部屋の中をうし、ふと、窓のブラインドを持ち上げてみたら、そこに人影があつたのでぎよつとして思わず「わっ」と声を上げてしまった。

反射的に飛びのく。

が、ブラインドが窓にぶつかる寸前に、その人影が激しく手を振っているのがちらりと見えた。

「あれ？」

どこかで見たような。

亜夜はそろそろと窓に近寄り、恐る恐るもう一度ブラインドを持ち上げてみた。

帽子を取って、ぺこりとお辞儀する少年。

II 「風間塵――くん？」

まじまじと窓の外を見ると、やはりあの少年がっこり笑い、拝むような仕草をしている。ド

アのほうを指差しているのは、中に入れてくれと言っているらしい。

亜夜はあつげに取られて、ドアを開けに行つた。

「お邪魔しまーす」

少年は——風間塵は帽子を取つたまま、ぺこぺこ頭を下げつつ入つてきた。

「あなた、どうやってここに？」

「その扉越えてきた」

塵はレッスンスターの壁を指差した。亜夜は絶句し、苦笑する。

またしても不法侵入か。平田先生に用心するように言っておかなければ。

「ううん、そうじゃなくて、どうしてここが分かつたの？」

「ごめんなさい、おねえさんの後ついてきたの」

「ええ？」

亜夜は目の前の少し頬を赤くした少年の顔をまじまじと見つめた。そして、さつき後ろに人の気配を感じたことを思い出した。やはり気のせいではなかったのか。

「どうして？」

戸惑つて尋ねると、彼はえへへ、と笑つた。

「きつとどこかにピアノ弾きに行くんだらうな——って思つて。おねえさんの弾きに行くところだつたら、いいピアノがあるだらうって思つたの」

亜夜は目をぱちくりさせた。

「それについてきたの？」

「うん」

「あなた、コンクール期間中どこに泊まつてるの？」

「お父さんの友達のやつてるお花屋さん」

亜夜はますます目をぱちくりさせた。

「練習は？」

「僕、コンクールの練習室のピアノ苦手なの。もっと弾いてる人の顔が見える、弾いてる人の匂いが残つてる、誰かんちのピアノのほうがいいなあ」

塵はそわそわと落ち着きなく亜夜の目を覗きこんだ。

「ねえ、一緒にここでピアノ弾いてもいい？」

② 亜夜は絶句した。

あたしもかつては天然だと言われたものだが、この子には負ける。天然というか、天衣無縫と
いうか。コンクールの真つ最中、争っているコンテスト生にくつついてきて、一緒に練習させ
ると頼むなんて聞いたことがない。

「おねえさん、あの人のピアノ弾いてたでしょう。あの大きい、王子様みたいな人の」

塵がそう言つてピアノを見たので、亜夜はぎくつとした。

聴いていたの？ あたしの演奏を？ マサルのカデンツァをなぞったとはいえ、すぐに自己流にアレンジして弾いていたのに。

塵は、隣のピアノの前に腰掛けると、蓋を開けてポーン、とAの音を鳴らした。

亜夜はその横顔を見ていて気付いた。

そういえば、この子、大学でも他の部屋で弾ってるショパンのエチュードをユニゾンで弾いていたっけ。とにかく恐ろしく耳のいい子なのだ。

と、塵は突然、オクターヴの激しいフレーズを弾き始めた。

あつ、と亜夜は声に出して叫ぶ。

マサルのカデンツァ。

塵は、あの難しいところを完璧に再現していた。一瞬、目の前にマサルが座っているのかと思つたほどだ。

ざわつと鳥肌が立った。

今、目の前で凄いものを——本当に凄いものを見てる、聴いている。

大学の廊下で感じたことを追体験しているかのようだ。

塵はパツと弾きやめると、ニコツと笑った。

「おねえさんの頭の中で、これがずっと鳴ってたでしょう。僕もそう。外に出た時、これを再現したいと思つたでしょう。すぐにピアノ弾きたいって思つたでしょう。僕もそう」
歌うように話す。

「だから、このあとどこかにピアノ弾きに行くって思つたの」

亜夜は再び、^Bと全身に鳥肌が立つのを感じた。

見抜かれている。すべて。あたしが感じたことも、ピアノに触れたいという衝動も。

やはりこの子は——初めて少年を見た時の感想が蘇る。

音楽の神様に愛されてるんだ。

あたしは？

そう考えて、亜夜は自分でも驚くくらいに激しく動揺した。

あたしは音楽の神様に愛されているのか？

一瞬、遥かな天の高みから一筋のスポットライトが射^さってきて、風間塵をパツと照らし出したような気がした。音楽の神様が手に持っているライトを当てたのは、亜夜のすぐそば、一メートルほど先にいる少年。彼はきらきらと祝福の光を浴びて輝いている。けれど、亜夜は手を伸ばせば光に触れそうなほど近くににいるのに、暗がり^{くらがり}に突^つ立つたまま誰からも見えないのだ。

おまえじゃない、私は風間塵を選んだ。

そんな声を聞いたような気がして、^③なんとも言えぬ嫌な痛みが胸を走り抜けるのを感じた。

息ができない。

亜夜は、頭の中が真っ白になった。

初めて味わう感情だった。全身を貫く、鋭いのにじくじくとした痛み。喉の奥に苦いものを感じる。

なんなのだ、これは。神に選ばれし者が目の前にいるという確信が、どうしてこんな痛みをあたしに与えるの？

その答えは、とづくに分かつていたように思う——自分が音楽から逃げたと認めなかったこと。自分は音楽をやっている、人よりも深く理解できている、と心のどこかで自惚れ、周囲を見下していたこと。才能がない、二十歳過ぎればただの人、などと呼ばれるのを心の底では深く恐怖していたこと。

さまざまな考えが頭を過ぎり、なかなか胸の痛みの残滓は消えてくれなかった。

「僕ね、先生に言われたんだ。一緒に音を外に連れ出してくれる人を探しなさいって」「え？」

つかのまぼんやりしていて、亜夜は少年が呟いたことが聞き取れなかった。

今なんて言ったんだろう？ 一緒になんとか、って。

「おねえさんはそうかもしれない、って思ったよ」

「何がそうかもしれないって？」

亜夜が聞き返すと、塵は急に照れたような顔になって「なんでもない」と手を振った。

「お月様、綺麗だったね」

塵は、不意に窓を振り向いた。

ブラインドが掛かっているし、ここに来るまで空を見上げる余裕なんてなかったな、と亜夜は

思った。

少年の白い指がひらりと舞った。

本当に、月光の中に舞い上がった蝶のように。

ドビュッシーの月の光。

ああ、本当に、綺麗な月。

この曲を聴くと、いつも ま と窓の外の夜空が目に浮かぶ。さえぎえとした、しかしらかな月光が、すべての音が消えた世界に降り注ぐさまが見えるような気がする。

しかも、この少年が弾くと、モノクロームに沈んだカーテンの模様まで見えてくる——

月の光に、巻きこまれる——月夜の魔法にかかる——

またしても身体の底から湧き上がる衝動に突き動かされ、亜夜は隣に座って一緒に「月の光」を弾き始めていた。

互いにアレンジをし、うねり、寄せては返す月の光の波に身を任せる。

うわあ——

亜夜は、全身をビリビリと電流のような歓喜が押し寄せてくるのに眩暈がした。

風間塵が笑っている。

大きく口を開け、笑っている。

いつのまにか、亜夜も一緒に笑っていた。どこまでも満ちてくる月の光、寄せる、うねる、寄せる、泡立つ、しぶきがきらめく。

どこまでも飛べそうだ——と、いつのまにか曲が変わっていた。

フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン。

どちらがこの曲を弾き始めたのだろう。どちらからともなく、としか言いようがない。

おお、さすが、「ずいずいずつころばし」をルンバにしただけのことはある。

亜夜は思わず破顔した。塵は全く戸惑わずについてくるし、ソロも堂に入ったものだ。交互にベースラインを弾きつつ、ソロの応酬。そして、次に気が付くと、「フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン」はベートーヴェンの「月光」の第二楽章になっている。

なるほど、こうしてみると、なんとなく出だしが似てるのよね、この曲。

そして、第三楽章。

二人は一糸乱れぬテンポで、全くユニゾンで第三楽章を弾いていた。

信じられない、完璧なユニゾン。自分が二人いて、ステレオサウンドで音を聴いているみたい。

この感覚をなんと表現すればよいのだろう——水上を滑るモーターボート。いや、猛スピードでしぶきを上げて水上スキーをしているような——ぞくぞくするようなスリル。一歩間違えたら、波に碎けて粉々になってしまう——ぎりぎりの快感。

そして、次の瞬間、亜夜は塵の「月光」を伴奏にしながら、「ハウ・ハイ・ザ・ムーン」のメロディを弾いていた。しばらく「月光」を続けていた塵も、じりじりといってきて「ハウ・ハイ・ザ・ムーン」に合流する。

最速テンポ。

塵は途切れることのないめまぐるしい十六分音符で伴奏をつける。合間に挟まる、亜夜の超高速グリッサンド。

飛べる。どこまでも飛べる。

亜夜は、ピアノを弾きながらいつしか天井を見上げ、更にそこを突き抜けて高い空に浮かぶ月を見ていた。

あそこまで。いや、もっと遠くへ。

今、あたしたちは月まで飛び越えている。

④ 実際、二人はその時遥か彼方の宙を飛んでいた。

コンクールも、神様も、何もかも忘れて漆黒の宇宙を。

⑤ 「あつ」

亜夜は、宙に浮かんだまま、遠い一点に光る星を見上げた。

春と修羅。あたしの。あそこに。

二人で同時に演奏を終えた瞬間も、亜夜はぼかんと口を開けて天井を見つめたままだった。

(恩田陸『蜜蜂と遠雷』より)

問1 ——線 a 「舌を巻いた」、b 「堂に入った」の意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a 「舌を巻いた」

- 1 言葉を失うほど驚いた
- 2 わけもわからず混乱した
- 3 手に負えず苦心した
- 4 どうかしてごまかした

b 「堂に入った」

- 1 落ち着いた
- 2 手なれた
- 3 力強い
- 4 心強い

問2 空らん A う C ま には、例のように同じ音をくり返すことばが入ります。頭文字をヒントにしてそれぞれ四字で答えなさい。

例 彼は と歩いた。 ↓ 答 てくてく

問3 ——線① 「マサルのカデンツァを再現していた」とありますが、ここに至るまでの亜夜の心情を説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 マサルの演奏が素晴らしかったことに刺激を受け、ピアノを弾きたいと思った。
- 2 マサルの演奏が思ったより良かったので、自分の演奏と比較したくなった。
- 3 マサルの演奏が失敗したことで、次の自分の演奏に対して不安を感じた。
- 4 マサルの演奏が自分よりも劣っていたため、真似をすることで優越感に浸った。

問4 ——線② 「亜夜は絶句した」とありますが、塵のどのような点に対して「絶句した」のですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 練習場に突然入ってきて、自分の曲の練習をするのではなく、その日のマサルのカデンツァを完璧に弾きこなした点。
- 2 練習場に無断で侵入してきた上に、自分もコンクールの出場者であるにも関わらず、競っている相手と一緒に練習をしたいと頼む点。
- 3 亜夜ですら練習する場所の確保に苦心したのに、自分は会場のピアノを使えるにもかかわらず、ここで練習がしたいというわがままを言う点。
- 4 自分ですら弾くことに困難を極めたマサルのカデンツァを弾きこなした上に、アレンジまでして、自分の優位性を示す無遠慮な点。

問5 ——線③「なんとも言えぬ嫌な痛みが胸を走り抜ける」とありますが、この痛みの原因としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の才能に自信が持てずに音楽から逃避してきたという引け目。
- 2 他の誰よりも深く音楽のことを知っていると上がり。
- 3 自分の才能の無さを周囲の人間から指摘されるかもしれないという恐れ。
- 4 才能を磨いてつねに多くの人から称賛されたいというこだわり。

問6 ——線④「実際、二人はその時遙か彼方の宙を飛んでいた」とありますが、この描写の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 塵とともに音楽を純粹に楽しみながら演奏に夢中になっている亜夜の実感を効果的に表現している。
- 2 亜夜と塵が二人きりでピアノを弾いて互いの才能を磨き合うことに熱中している様子を表現している。
- 3 塵の頭の中で思い描いているであろう演奏を亜夜が読み取っていることを表現している。
- 4 二人で弾くことによつてたがいに実力以上のものが引き出せていることを表現している。

問7 ——線⑤「『あっ』」とありますが、この時の亜夜の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 塵とともに即興の演奏をしているうちに、コンクールのすべてを忘れてしまっていた。
- 2 塵とともに即興の演奏をしているうちに、夜が更けてしまったことに気がついた。
- 3 塵とともに即興の演奏をしているうちに、塵の才能に追いつけるような感覚を抱いた。
- 4 塵とともに即興の演奏をしているうちに、自分が弾くカデンツアのイメージが湧いた。

問8 本文の表現の特徴について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ……線Ⅰ「やはり、何かを叩いている。どこで？」は、口に出したいのに出せない心情を倒置法を用いて表現している。

2 ……線Ⅱ「『風間塵——くん？』」は、「——」の部分をあえて省略することで、読者の興味をひく工夫がなされている。

3 ……線Ⅲ「遙かな天の高みから一筋のスポットライトが射ってきて、風間塵をパッと照らし出したような気がした」は、晝夜と塵に才能の違いがあることを擬人法を使って表現している。

4 ……線Ⅳ「猛スピードでしぶきを上げて水上スキーをしているような——ぞくぞくするようなスリル」は、二人の演奏が絶妙なバランスで成立していることを直喩を用いて表現している。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

未明の馬

丸山 薫

夢の奥から蹄の音が駆けよってくる
それは私の家の前で止まる
もう馬が迎えにきたのだ

私は今日の出発に気付く
すぐに寢床を跳ね起きよう
いそいで身支度に掛からねばならない

ああ その間も耳にきこえる
彼がもどかしそうに門の扉を蹴るのが
焦ら立って幾度も高く嘶くのが

そして 眼には見える
霜凍る未明の中で

彼が太陽のように金色の翼を生やしているのが

(詩集『涙した神』より)

問1 この詩の中でくり返し使われている表現技法としてふさわしいものを次から一つ選び、番

号で答えなさい。

- 1 体言止め 2 直喩法 3 反復法 4 倒置法

問2 この詩でえがかれている季節がうかがえる表現がある一行をぬき出し、最初の五字で答えなさい。

問3 この詩の第一連と第二連では、短文を重ねることで独特のリズムを生んでいます。ここからどのようなようすを感じさせますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 何かにせめ立てられて追いつめられたようす。
- 2 一日がはじまるのにあたって心をはやるようす。
- 3 計画どおりにものごとが進んではれやかなようす。
- 4 早く時間が過ぎていくことをあっけなく思うようす。

問4 この詩の第三連と第四連に見られる表現について説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 第三連と第四連は対応する関係にあり、同じ場面についての描写びようしやがそれぞれことなる感覚を用いて表現されている。
- 2 第三連と第四連は補い合う関係にあり、時間の経過にしたがって主題がしだいに明らかになるよう表現されている。
- 3 第三連と第四連は対立する関係にあり、馬のはげしいかりと私の静かな期待の差さが際立だつように表現されている。
- 4 第三連と第四連は連続する関係にあり、私の場所がうつるとともに馬へと視点が集まっつていくよう表現されている。

問5 この詩に登場する「未明の馬」とはどのようなものだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一日の予定をきびしく管理し、機械的な活動を求める管理人。
- 2 夢の世界から目を覚まさせ、現実生活を見つめさせる指導者。
- 3 自分を勇気ゆうきつけて、気持ちを前向きにみちびいてくれる使者。
- 4 昨日までの生き方を捨てて、新世界に飛び立つための案内人。

4 次の問いに答えなさい。

問1 後の意味になるように、空らんに入らなさい。①～⑥のことわざ・慣用句を完成させなさい。ただし、□はすべて、ひらがなでうめるものとします。

① 立つ□□がない

|| 自分の立場をなくすこと。

② とりつく□□がない

|| たよりとしてすがる手がかりもない。

③ 高□□に出る

|| 相手を頭ごなしに威圧するさま。

④ □□□□を踏む

|| ためらつて、どうしようかと迷う。

⑤ 熱に□□□□

|| 夢中になつて見境がなくなる。

⑥ □□□□□□ではないかない

|| 普通のやり方では成功しないこと。

⑦ □□□□□□□□山のものともつかぬ

|| どのようなものか、どのようなものか、どちらとも決めがたいことのとえ。

問2 ③と同様に将棋から生まれた「そうなるのは避けられない」という意味のことばを「至」を用いて、漢字二字で答えなさい。

